

台湾漢人住居にみられる〈総舗 chóng-pho〉の調査研究

— 日本植民地期以降の〈眠床〉－〈和室〉の結合とそのゆらぎ —

主査 青井哲人*1

委員 角南聡一郎*2, 陳 正哲*3, 張 亭菲*4

台湾漢人の間では、住宅内の房間（居室）の一部ないし全部に床を張り、その上に雑魚寝する生活が広く行われてきた。この揚床をホーロー語で「総舗 chóng-pho」と呼ぶ。地床に眠床（寝台）を置くのが常識とされる漢人住居になぜこのような特異な変容が生じたのか。本研究では植民地期における台湾家屋・日本家屋の交渉関係をこの「床」の存在に注目して検討する。彰化縣田中（市街地）、台南市灣裡（村落）での集中的な調査と、台湾各地での事例収集の成果を踏まえ、総舗の現存状況や類型を把握した上で、(1)起居様式、(2)家族社会、(3)文化意識、(4)材料と技術、の各視点に沿って現段階での知見を示し、総舗を歴史的に位置づけるための仮説と課題を提出する。

キーワード : 1) 台湾漢人住居, 2) 日本植民地, 3) 総舗, 4) 眠床（寝台）, 5) 揚床, 6) 和室, 7) 起居様式, 8) 家族社会, 9) 文化意識, 10) 職人（大木・小木・畳職）

'CHÓNG-PHO' (RAISED FLOOR) IN HAN TAIWANESE DWELLINGS

— Combination and Transition of the Chinese Bed and Japanese Raised Floor during the Japanese Colonial Era —

Ch. Akihito Aoi

Mem. Soichiro Sunami, Chengche Chen, Tingfei Chang

The Han Taiwanese dwellings have widely shared a unique raised floor called *chóng-pho* mounted in the room to sleep on, contrary to the academic belief that Han people, since ancient times, had placed their beds on the ground. Rediscovering the presence of *chóng-pho*, this study examines the influence of Japanese raised floor on Han Taiwanese dwellings under the colonial rule (1895-1945). The transition in (1) mode of daily life, (2) family system, (3) cultural identity, and (4) material and technique will be discussed based on the data collected from the intensive field surveys conducted in Tian-zhong, a commercial strip, and Wan-li, a rural community.

1. はじめに：総舗 *chóng-pho* の再発見

台湾は、17世紀のオランダ植民統治、鄭氏政權統治、同世紀末から約2世紀間の清朝統治、1895～1945年の半世紀にわたる日本の植民地統治、つづく国民党政權統治と、激しい変転の歴史を辿ってきた。17世紀以降、対岸福建・広東地域から断続的に移住してきた漢人は、オーストロネシア系原住民のうち平地住民と広く通婚して子孫をなし、彼らを文化的にも同化しながら今日の台湾漢人^{注1)}の基礎を形成したとされる。漢人移民を出身地別にみれば閩南地方（福建南部）が大部分を占める。彼ら閩南系台湾人の言葉をホーロー語^{注2)}という。

このホーロー語に、「総舗 *chóng-pho*」という語彙がある。房間（居室）内にしつらえた揚床 *raised floor* を指す言葉だ。漢人は、家屋全体を土間床とし、卓子・椅子や眠床（寝台）を置いて生活する起居様式を早くに確立し維持してきたとするのが常識であろう。しかし台湾では、三合院に代表される邸宅や農家であれ、また市

街地の街屋（町家）であれ、房間（居室）の一部ないし全部に床を張り、ムシロやフトンを敷いて家族が雑魚寝する習慣が形成された。後述するように、総舗は植民地後半期に台湾漢人住居に急速に浸透し、しかも植民地解放後も広範に定着してきた。床と生活様式という住居史の重要問題をめぐってきわめて興味深い現象であり、また伝統的・土着的住文化と日本植民地支配の関係についても検討に足る問題を含んでいる。ところが、総舗の存在は学術的にはまったく看過されてきた。

ここで、総舗の形態的特徴をあげてみよう。

漢人住居にあつては、房間は壁で囲まれた閉鎖的な空間をなす。その土間床の一部ないしほぼ全部にわたって、束を立て、根太を走らせて床板を並べる。床下は収納に充て、床上には日本式の畳を敷き詰め、天井を吊る場合も少なくない。手前に残された土間との間は引違いの障子を入れて仕切り、鴨居上は欄間とするほか、押入や床の間さえ見られる。こうした和室型の総舗の成立は、約

*1 明治大学 准教授（当時人間環境大学准教授）

*2 (財) 元興寺文化財研究所 主任研究員

*3 南華大学（台湾） 助理教授

*4 藤田建築設計事務所嘱託

約半世紀に及ぶ日本植民地期を通じて台湾に建設された日本人住宅（官吏・軍人の官舎や町家等）の影響を抜いては説明できない。

しかし、総舗がすべてこうした記述に収まるわけではない。畳・障子・襖・欄間・天井・押入といった要素を欠き、簡素な板床のみとする事例も多い。さらに、本研究の過程で、20世紀前半まで広く存在した竹造家屋に竹の揚床が設えられていた事実にも突き当たった。これらを和室型の総舗の簡略化されたものと見ることもできるが、逆に何らかの原型的な揚床の存在を仮定し、その上に日本家屋の諸要素が重ねられたと見ることもできよう。いずれにせよ、一方的な「日本化」（植民地支配の影響）を無条件に強調すべきではなかろう。

総舗はなぜ台湾漢人の生活に広く受け入れられたのか。また総舗は台湾漢人の日常的な生活様式をどのように変えたのか。総舗は基本的には就寝の設えであり、漢人の伝統的眠床（家具としての寝台）から、室内に拡張され建築的に固定された寝間への転換とみなせる。しかし、床上空間の拡張が、生活の空間的分節を徐々に組み替える可能性があるとするれば、就寝だけの問題ではすまない。また、総舗をつくる習慣は植民地解放後も持続し、現代の住宅でも室内を上足とする習慣や、「和室」と呼ばれる揚床の部屋の流行が知られている。総舗はたんなる外的影響の結果ではなく、(1)起居様式、(2)家族社会、(3)文化意識、(4)材料・技術といった住環境をめぐる諸条件の変容に関わっているだろう。

以上のように、総舗は台湾漢人住居史を大きく捉え直す鍵になりうる。本稿では、調査概要、文献と先行研究、総舗の現存状況や類型等を概観した後、上記の各視点に照らして現段階での知見を示す。総舗の起源論についても未解決の問題が多いが、仮説と課題を提示したい。

2. 調査概要

本研究の主たるフィールドは、台南市湾裡（農漁村集落・三合院）と彰化県田中鎮（市街地・街屋）の二カ所とした。一般に台湾漢人の住宅は、合院系住宅（邸宅・農家などで三合院が一般的）と街屋系住宅（市街地の住宅、日本でいう町家に相当）とに分けられる。また、予備調査の経験から、総舗の現存状況は村落部に厚く都市部に薄いことはつかめていた。なお、後者は台湾中部の穀倉地帯に位置する比較的豊かな地域だが、前者は農業に適さない南部の貧困地域の典型である。さまざまな点で条件の異なる二集落を選んだことになる。以下に示すように、台湾調査は都合3次にわたって進めてきた。

第1回台湾調査（2006年7月25日～8月30日）では、上記調査地について都市計画図・地籍図等から集落平面図を作成し、詳細調査のエリアを限定して悉皆的な総舗の把握を試みた。調査許諾を得た家屋では実測と写真撮

影を行い、あわせて住人への聞き取りも行った。

第2回台湾調査（2006年12月24日～2007年1月8日）では、調査地周辺で大木・小木匠（日本でいえば大工と建具・家具職）、畳職へのインタビューを行った。台南市中心部の五條港地区でも総舗の調査を行った。

第3回台湾調査（2007年7月28日～8月27日）では、彰化県の鹿港鎮市街や永靖郷の村落で実測調査を、また湾裡では住民インタビューを行い、台南県、高雄県の山間部でも聞き取りを試みた。

湾裡では研究委員の陳正哲がコミュニティとの密接な関係を築いていたため、エリアを定めた悉皆的調査だけでなく、インタビューや集会などを行って豊富なデータを得た。これに対して田中では、商業者は調査を嫌う傾向が強く、加えて所有・賃借関係が複雑であり、建物も所有が細分化されているなど、調査は予期通りには進捗しなかった。このため同じく彰化県内の鹿港鎮でも調査を行い、総舗の事例や聞き取りデータを補った。

3回の調査において、内部まで実見した家屋は約90棟、総舗は約120室程度になるが、うち実測データを得た総舗の数は約60である。なお、青井・張は本研究以前にも金門島・澎湖島を含む台湾各地で総舗の調査をしてきたので、その知見も部分的に活用している。

文献調査は、研究期間内に適宜行った。次章ではまずそれらに目を通していくことにしよう。

3. 文献にみる総舗

3-1 植民地期 1895-1945

植民地期の文献に「総舗」の二字を見いだすのは容易ではない。管見では、総督府が編纂したホーロー語の辞書『臺日大辞典』（1931年）が唯一である^{注3)}。

ソンプオ 総舗。(新) 牀板を張った所。牀張り。板張り。

漢字は「舗」でなく「鋪」を用いているが同意である。なお、今日のローマ字表記では *chóng-pho* であるが、植民地期には片仮名を基にした発音記号が採用されていた。すでに述べたように、実際の総舗には日本の座敷さながらのものから、簡単な板床まで形態的な開きがあるが、辞書の記載はその最大公約数を簡潔に述べている。

ところで、上の引用に「(新)」とあるのは新語の意であり注目される。編者の認識が正しいとすれば、この辞書の刊行(1931年)よりも少し前、おそらく1920年代に総舗という語彙が人口に膾炙していくプロセスがあったのではないかと仮定してみることができそうである。もちろん物と言葉は一対一に対応するわけではないから、漢人住居に揚床（それがどのような形態であれ）が登場するのはもっと早いかもしれない。ともかく、ここで確認しておきたいのは、言葉の浸透・定着の過程が実際の形態（物）の普及過程と無関係とは思われず、その意味

でやはり 1920 年代をひとつの画期として想定しておくこと、また 1930 年代以降なら台湾漢人住宅の多くに総舗が存在したとみてよいこと、の 2 点である。

次に、「総舗」という語は伴わないものの総舗を示すとみてよい文献上の記載を紹介してゆく。

まず建築分野では、1939 年に当時の総督府技師が建築誌に書いた「臺灣住宅と建築行政」^{註 4)}と題する記事が、農村部の三合院の平面図を示し、その右護龍の前方の房間に「日本間」の文字を書き込む。土間との境界に障子らしき表現と 2 間の押入がみえるので総舗とみてよい。ただし本文中に言及はい。もちろん、総督府の建築規制に総舗を誘導する性質のものは見当たらない。

民俗学方面では、戦中期の台湾において民俗学・人類学・考古学分野の貴重なサロンとなった雑誌『民俗台湾』(1941～45 年)に、総舗に関連する記事をいくつか発見できる。ひとつは台北市の艋舺における邸宅内の雑居生活を調査した「艋舺の雑居生活」(1942)で^{註 5)}、略平面図を掲げて寝床を 3 種に区別している(図 1)。すなわち、「寝台」は眠床(図 2 の A を参照)、「板敷」は板を並べただけの簡素な総舗(C1, C2)、「畳」は畳敷きの総舗とみられるのである(C3)。著者がこれら 3 種の寝床の形態を識別していることは、同時代的な認識を示すものとして重要である。確証こそないが、著者黄良銓はおそらく漢族系台湾人で、「総舗」の語は知っていたであろうが、記事では説明の煩わしさを避けて適当な日本語をあてがったものと思われる。

いまひとつは呉新榮のエッセイ「私の内臺生活の交流」(1944 年)である^{註 6)}。彼は台湾式の自宅の房間に「数年前に」変形五畳敷きの揚床をつくり、そこで寝起きしている(C3 のごときタイプであろう)。著者はこれを文中で「ザシキ」と呼び、これをつくった理由を 3 つあげる。第一に「子供が多くなると雑魚寝をする」のに都合がよい、つまり眠床に比べて一度に大勢が寝られること、家族数(構成員数)が増えても対応可能であること。第二に、広い床上空間は実質的に「眠床」にも「椅子」にも「物置き」にもなって「便利」であること。広い床上空間は、眠床では不可能な多様な行為を許容する。とくに総舗上に座る習慣があったことは、総舗がたんなる寝床ではなく一定の生活空間になりえたことを示す点で重要である。そして第三に「タタミ敷のザシキ(タタミを敷かないザシキもある)を持つことは中流階級の流儀である様に思はれてゐること」。総舗の台湾人家屋への浸透が、中流層の日本文化志向と関係していたことを物語る興味深い記述である。実は、この記事の直前に、中川正が「内臺生活の交流について」と題する文を同誌に寄せ、「二つの異なった生活様式の交流」はほとんど観察できない^{註 7)}と書いていた。これに対して呉新榮は、「本島人側として実際の所から見」れば「臺

湾生活の内地化」が日常の大部分に及ぶのだとし、自身の一日の行動をたどっている。衣食住全般にわたる「日本化」のきわめて貴重なドキュメントである。

さて、植民地期の文献で台湾漢人住居にふれたものは、政府による旧慣調査、衛生調査の類から、習俗文化に関する著作、建築史分野の著作など様々あるが、上に見てきたわずかな例外をのぞけば、総舗の存在のうかがえる文献はほとんどない。たとえば、東方孝義『台湾習俗』(1942 年)は、「臺灣人の家屋は床張を有しない。総ての室は土間で、生活は卓子と椅子で就寝は寝臺を用ひて居る」^{註 8)}と述べる。藤島亥治郎『台湾建築史』(1936 年の台湾調査の成果を 1948 年に刊行)でも眠床(寝台)の記述しかない^{註 9)}。この時期、すでに総舗は広範に浸透していた。同じ時期に、植民地下台湾の生活文化・物質文化の膨大な記録を残した国分直一(考古学・民俗学)も、三合院住宅の構造をホーロー語の名称とともに詳細に記録した報告さえ著しながら、総舗について何も記していない。国分は、台湾家屋への「日本式建築からの影響」は付属便所くらいのものだとしながら、「台湾出身の漢族系畳屋が忙しく仕事をしている情景は興味深い」などと書いている^{註 10)}。総舗の広範な普及を知っていれば、彼等が製作した畳の納品先が日本人住宅ばかりでなかったことも容易に推察しえたであろう。

以上のように、日本人の眼に総舗はほとんど映ることがなく、台湾人の数少ない執筆物が貴重な証言となる。『臺日大辞典』の「総舗」の項も、編纂協力者である数名の台湾人によって拾い上げられたものであろう。

3-2 植民地解放から現在まで 1945-2007

かくして植民地中期から後期にかけて台湾漢人住宅に急速に定着していった総舗は、植民地支配の終焉とともに消滅したわけではない。たとえば、1959 年から 61 年にかけて、人類学者の妻として台北近郊農村の一家庭に住み込んだマージャレイ・ウルフも総舗を記録している。

寝室には、伝統的な彫刻が施された家具と頑丈だけどびつな形の蚊帳付きベッドがある。また日本式の畳を敷き詰めただけの寝室もある。畳は子どもが多い家族にとって非常に便利である。なぜならば、何人でも寝られるから。寝つけない熱帯夜に、古いタイプの寝台なら熱くてオープンの中にいるようだけれども、畳はかなり涼しい。^{註 11)}

「蚊帳付きベッド」は伝統的な眠床、いわゆる「紅眠床 āng-bīn-chhng」のことであろうが(図 2 の A)、ウルフが見たのは比較的簡素なものらしい。むしろ、畳の寝室とは総舗(C3)のことだ。また次のような記述もある。

食堂の並びに増築された部屋は、別の寝室になっている。ここはリン・アボウの未婚の息子の部屋だが、彼はいつも遊びに来た子どもたちや男性の親戚、また短期住み込みの雇い人などと畳の寝台と一緒に寝なければならない。^{註 12)}

「畳の寝台」も総舗を指す表現であろう。総舗は家族の増加に柔軟に対応しうだけでなく、親戚や「住み込みの雇い人」など、臨時的・短期的な訪問者や住人を雑魚寝させる寝床という役割もあったわけである。

建築家の郭中端は、母親が大陸から來台したいいわゆる外省人で、その母親の興味深い体験を紹介している。

母親は小学校の教諭に就職していたため同僚教諭の家や生徒の家庭訪問で台湾本省人の住まい方を知ることもあった。伝統の煉瓦造の家にも畳の敷いた部屋のあることに驚き、そこを「総舗」と呼び家族全員のベッド代わりであることにも驚いた。^{注13)}

「総舗」の語を記載した希有な例である。別の箇所では、台湾住宅の寝床は伝統的な眠床ばかりでなく「房間の一部を板の間とし、その上で寝起きする形式のものも多い」と述べる^{注14)}。これは板床の総舗(C1,2)であろう。

さて、台湾の近代住宅史研究では、伝統的な漢人住居に対して、その「西洋化」こそ盛んに議論されるものの、「日本化」の検討はほとんどなされていない。たとえば近年の台湾住宅史研究の水準を示すと考えられる沈祉杏『日治時期台湾住宅発展』(2002)では、「台湾」「日本」「西洋」の各「住宅原型」の植民地下における影響関係を探るが、ベランダ、応接間など平面構成上の付加、オーダー、アーチ、ペディメントなどの外観様式の特徴から「台湾住宅原型」の(日本を媒介した)「西洋化」を見ると同時に、いかに漢人住宅の文化的規範が持続したかを主な考察の対象とする。そして同書は「日本の影響を受けた台湾住宅類型」は詳しく論じられるだけの事例を欠くとしている^{注15)}。もっとも、植民地期に建てられた日本人家屋の畳敷きの和室の影響は、入口で靴を脱ぐ現代の台湾生活文化にまで及ぶと述べる箇所もあるが、総舗の存在は認知しているか否かもはっきりしない。

住宅計画学分野では、呉明修(1993)が台湾における漢人住宅の住い方の変遷を表にまとめ^{注16)}、「寝室」については、清朝時代＝「中国式ベッド親子分寝、主体性明確」、日本時代＝「タタミの流行、町家・農家・士紳住宅の寝室にタタミが入る。大部屋での親子雑居眠が発生。一次主体性薄れる」、戦後＝「タタミが板間に変る。タタミの量産激減。洋式ベッドが流行、個室分寝に戻る。個室の主体性も回復する」と簡潔に記している。「タタミの流行」や「大部屋での親子雑居眠」などは総舗のことを指すものとみてよいが、総舗自体の歴史的な解明を目指した研究ではない。

この他、楊秋煜、賴裕鵬は、それぞれ桃園県大溪、彰化県鹿港の街屋を調査した修士論文で総舗に言及している(総舗の二字は用いない)。楊は、総舗は子供をたくさんうけた時代に必要とされた形式であって、子供の数が減るとともにプライバシーの観念が取って代わったと指摘する^{注17)}。賴は、「畳あるいは板敷の方式を用い、

跪き臥す姿勢で使う」房間の設えは日本家屋の影響の現れとし、「日本人が来る以前の台湾には見られなかった生活方式」とするが、根拠は示されない^{注18)}。

この他、民家の調査報告書などでも、総舗を図面化している場合はむしろあるが、名称としては「広床」「坑床」「通舗空間」「和室」「日本房」などの語を恣意的に選んで付すケースが多い。台湾人研究者も、ホーロー語の「総舗」を記すことはほとんどなく、民俗学・人類学的視点の希薄さは否定しがたい^{注19)}。

以上のように、総舗にふれた研究は皆無ではない。しかし、植民地支配がいかに台湾人の住生活の日常をつくり変えたのかという問いを総舗に即して追求した研究はない。生活者の語彙である「総舗」はたいてい無視され、この語の下で実際に指し示される形態の広がりも考慮されず、その成立・変容過程にも関心が及んでこなかった。

4. 総舗の現存状況と特徴

次に、筆者らの調査に基づき、市街地部と村落部における総舗の現存状況や全般的特徴を概観しておく。

4-1 市街地(彰化縣田中・鹿港)

図4は、田中・鹿港両地区で調査した街屋の中から主なものを選び、平面図中に総舗の配置を図示したものである。房間(居室)はどれも任意に総舗にすることができ、総舗をどこに置くかは原則も傾向性もない。

これら地域の場合、2階も土足としているため、1階の場合と同様に、床上にさらに束を立て揚床をつくる。しかし澎湖島馬公では、街屋の2階では床板に直接畳を敷いて続き間とし、片側に板敷きの廊下をとって、互いに障子で仕切るなど、ほとんど日本家屋と見紛うばかりの内部空間がみられる。この状態は土足を基本としなければ成立しないから、2階以上では実質的に床座の起居様式が浸透していた可能性も示唆する。

田中・鹿港では、店の空間に直接総舗が面する例はない。しかし桃園県大溪では店に面する房間を総舗とし、しかも二間続き(間仕切りは襖)とする例が少なくない。床高さは1尺半程度で、店に直接に障子のスクリーンが面するので、前土間+通土間型の日本の町家と言っても違和感がないほどである。

ところで、個々の総舗の年代(製作年)を明確に確定するのは困難だが、住人の記憶をたぐり寄せればおよその製作時期が分かることが多い。筆者らの調査した範囲では、現存する最も古い総舗は1920年前後に遡る程度である。これ以降、1960年前後までにつくられた総舗は、床高が50～60cm程度(2尺弱)とかなり高い。この時期は伝統的な眠床(紅眠床)も広く用いられており、多くの家族が各寝室に眠床を置くか総舗をしつらえるかを任意に選んだと考えられるが、趨勢としては総舗が眠床を圧倒していたようだ。

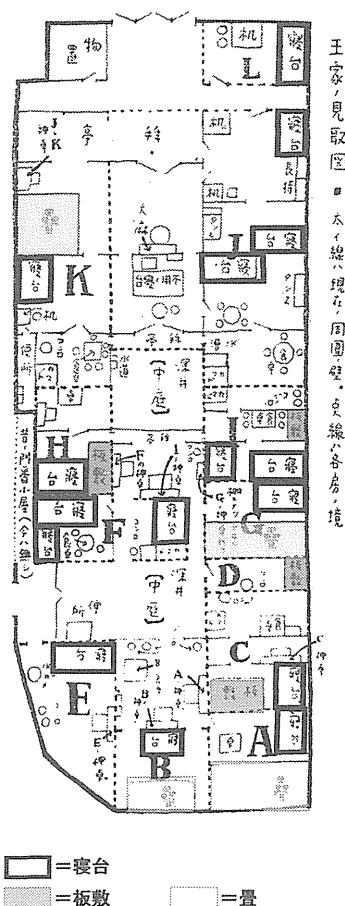


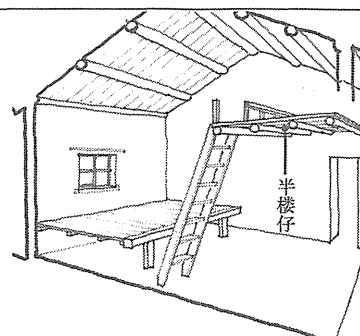
図1 植民地末期に記録された総舗の事例

出典：『民俗台湾』2-11（1942年11月）。原図中のA～Lは房（世帯）、点線はその領域の区分を示す。

C1 総舗（板床のみ）

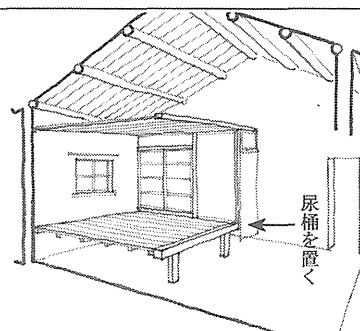
- ・床高 = 50 ～ 60cm
- ・床上に箆箆を置く場合も多い。
- ・土間上部の頭上に張られたロフト状の床は、「半楼仔」と呼ばれ、物置もしくは小さな子供の寝床として使われる。

*この類型が必ず半楼仔を持つわけではない。



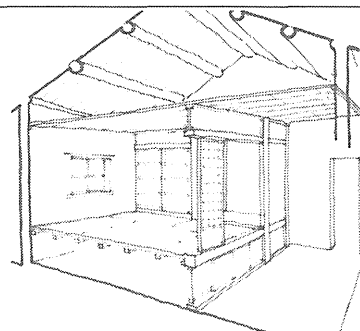
C2 総舗（板床+天井）

- ・床高 = 50 ～ 60cm
- ・天井を張ることで、土間との境界にカーテンを吊るしたり、障子を滑らせることが合理的になる。
- ・尿尿桶はA, Bでは床下に置かれていたが、このタイプでは壁際に専用の置場を設ける例がある。



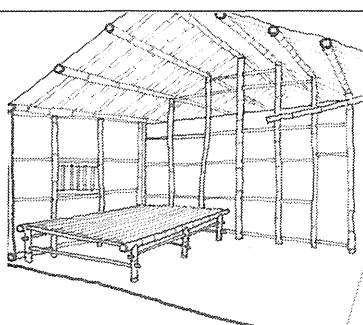
C3 総舗（和室型）

- ・床高 = 50 ～ 60cm
- ・畳・障子・押入・欄間あるいは床の間といった日本家屋起源の要素が積極的に採用される。
- ・天井は多くの場合土間側まで連続して張り渡す。
- ・このタイプでも尿尿桶の置場がつく場合がある（汲取式便所が導入されれば不要になる）。



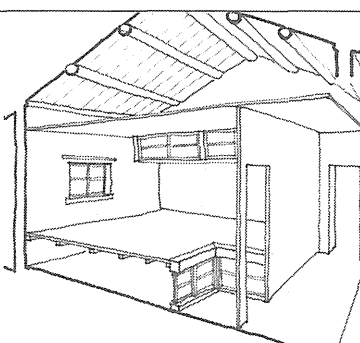
T 竹床

- ・床高 = 50 ～ 60cm
- ・竹管厩（竹造家屋）では、柱・貫・母屋・垂木など一切が竹でつくられ、寝床も「竹床」（竹製の揚床もしくは寝台）であった。
- ・図は台南縣自然史教育館に復元展示された竹管厩を参考に作成した。



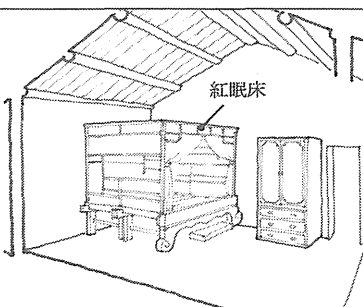
C4 総舗（個室型）

- ・床高 = 50 ～ 60cm
- ・土間側に壁を立て、回転ドアを開けて出入りする。
- ・ドアの回転半径分だけを土間として残し、他はすべて揚床とする。



A 紅眠床

- ・床高 = 50 ～ 60cm
- ・漢人の伝統的な寝台で、高価なものは豊かな装飾が施される。
- ・嫁を迎える際に製作（購入）するが、貧しい階層には用意できなかった。
- ・4本脚の長方形平面の台を2基並べるので八脚式という。その上に天蓋等を組み立てる。



C5 総舗（低床型）

- ・床高 = 15 ～ 20cm
- ・床面は商品化されたフローリングを用いる。
- ・ドアの回転半径分のみを土間とする。

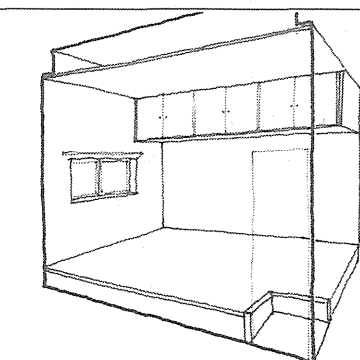
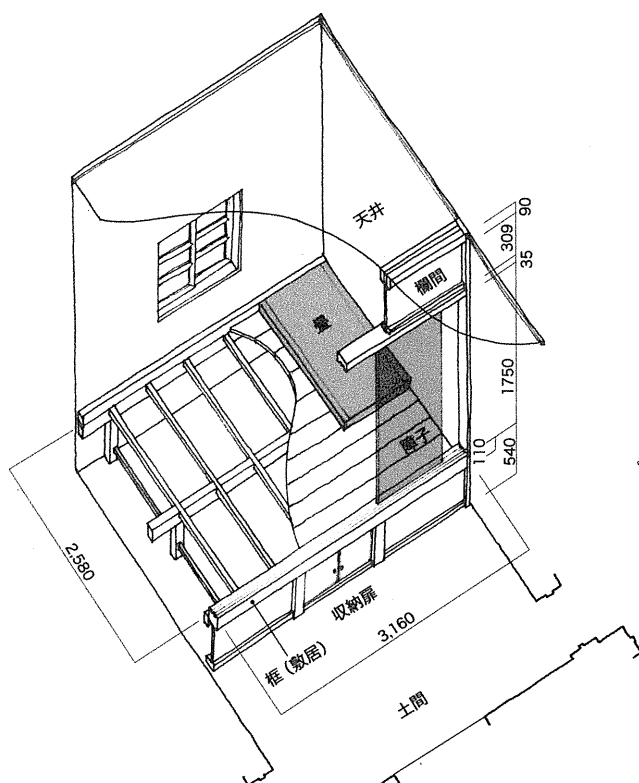


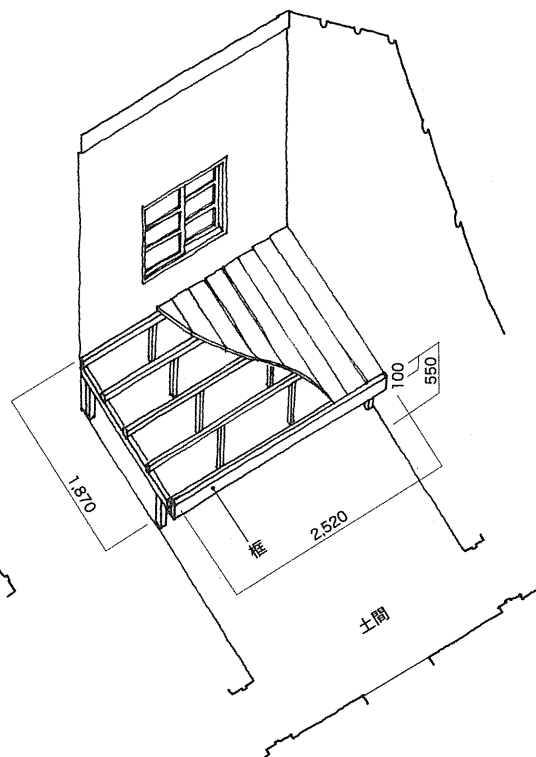
図2 竹床（T）、紅眠床（A）および総舗（C）の類型

これまでの調査に基づき、典型例を図示する。C5をのぞき、三合院の大房（家長の寝室で、正庁の左に隣接する房間）を想定して作画している。



■田中 z175-68 三合院・大房
類型 C3 (図 2 参照)。ただしかなり簡素な部類に属す。

- ・ 建築は 1950 年代。総舗は 1970 年代制作。
- ・ 畳は撤去されているが、元来は内法 3,160×2,580mm に 6 帖敷であった。
- ・ 障子は見付寸法 800×1,750mm、4 枚引き違い。



■湾裡 w1235-07 三合院・大房
類型 C1 (図 2 参照)。ただし半檼仔はない。

- ・ 三合院。建築は 1950 年代。建築時に総舗も制作。
- ・ 板床の上にゴザ等を敷いて寝る。天井を吊らず、化粧小屋裏とする。
- ・ 障子がなく、框材は敷居を切る必要がないので薄いものを使っている。

図3 総舗の構造 (例)

障子・欄間など、総舗各部を指すホロー語の名称は存在しない場合が多いので、混乱を避けるためここでは日本語表記とした。

筆者らの調査した範囲では、田中・鹿港など台湾中部では、総舗は敷畳・障子・欄間・押入といった日本家屋起源の要素を取り込んだ和室型の総舗が多い (図 2 の C3)。しかし 1960~70 年代以降、総舗は流行らなくなる。筆者らの調査事例も、大半がそれ以前につくられた総舗が使われずに放置された状態にあるため、物置代わりになり、柱が傾き、畳を腐らせてしまっている。

ところが近年では、床を高さ 15~20cm 程度とし、室内の全部を板張り (フローリング) とするものが増えてきている (C5)。これも総舗と呼ばれる。

4-2 村落 (台南市湾裡)

湾裡では一定のエリアを限定して悉皆的に調査を行うことができた。図 5 は、台南市湾裡路 235 巷に沿って連続する 3 棟をすべて実測できたケースである。中央の 9 号は 20 世紀初期、7 および 11 号は 1950 年頃の建築であり、RC 造 2 階建ての建物 (屋上に 1 層増築) は 7 号の左護龍を 1970 年代後半に改築したもので、建築時に 1 室は総舗とした。現状で 10 室が総舗であるが、聞き取り調査により 6 室の総舗が近年撤去されたことが分かった。庁 (正庁や居間・食堂) 以外のいわゆる房間 (居室) は、最近までほぼすべてが総舗であったことになる。

他の聞き取りでも、湾裡では房間といえば総舗とするのが当然だったと誰もが口を揃える。「総舗をつくらなくてどうやって寝るの」と聞き返す人も少なくない。そのことが具体的に実証できたケースである。

また筆者らは台南市湾裡路 440 巷に沿った家屋群を悉皆的に調査した。元来はやや小規模の三合院 (平屋建て) が隙間なく櫛比していたが、1950~60 年代以降、部分的あるいは全面的に RC 造の 2F 建てに建て替えられてきている。この通り沿いの家屋で、確認の術がなかった数棟をのぞく 27 棟を母数とすれば、総舗が現存する家屋は 13 棟、総舗の数は 21 で、房間の総数に対して 1/6 程度が総舗である。総舗は今日もはや房間の一般解ではなく、洋式ベッドが圧倒的に優位にあると言ってよい。しかし、湾裡の総舗は多くが実際に使用されている点で、田中・鹿港等の市街地部とは異なる。

さて、現存する総舗を年代からみると、1930 年代~60 年前後のものが一団をなす。湾裡では畳敷は稀であり、大半が簡略な板床とし、天井を張り、障子やカーテンで土間との間を仕切る (図 2 の C2)。より古いものは束を立て根太を走らせて板床を並べ、正面のみ框を据えた単純な構成であり、正面の間仕切りも側面の収納も

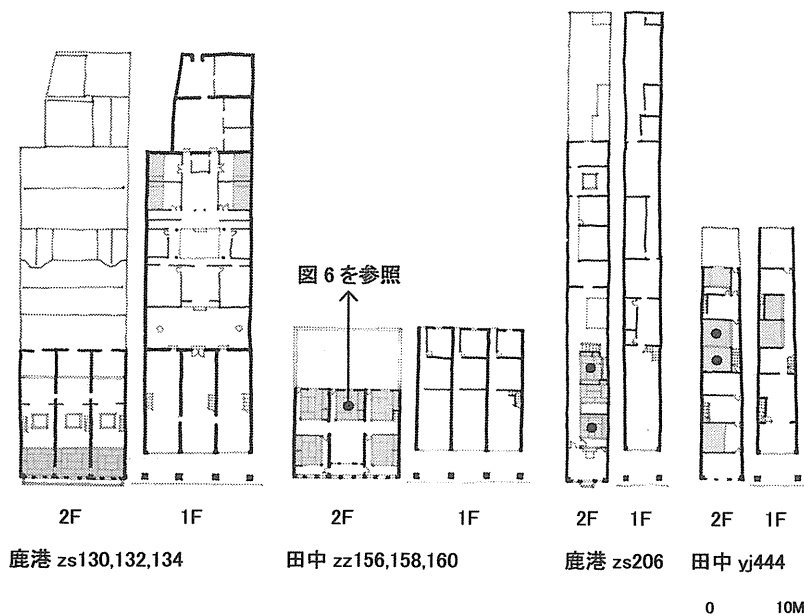
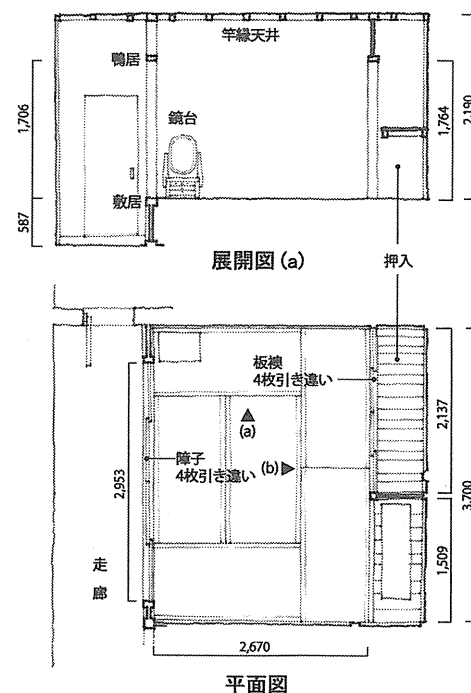


図4 街屋における総舗の配置と現存状況（例）

総舗に墨を入れた。●を付したもののみ現存（他は間取りにより復元）。



平面図

展開図(b)

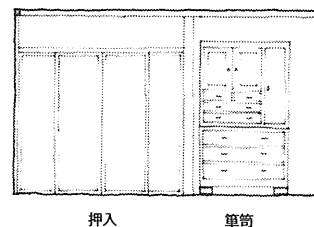
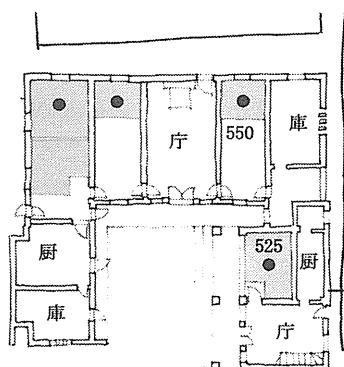


図6 総舗（和室型）の例

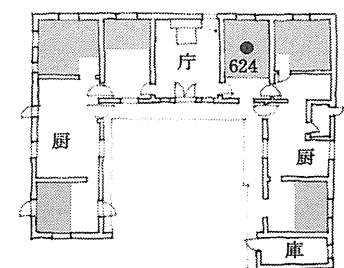
田中 zz158, 2階。建築・総舗とも1919年頃。天井の竿縁は、走廊（通路）から室内を超えて押入内までを均等に割り付けている。障子・襖の割り付けは畳とは無関係である。いずれも総舗ではまったく一般的な仕事である。

wl235-07
煉瓦造平屋建 ▶
1950年頃



RC造2階建
（+増築1層）
1970年代後半

wl235-09
煉瓦造平屋建 ▶
20c初



wl235-11
煉瓦造平屋建 ▶
1950年頃

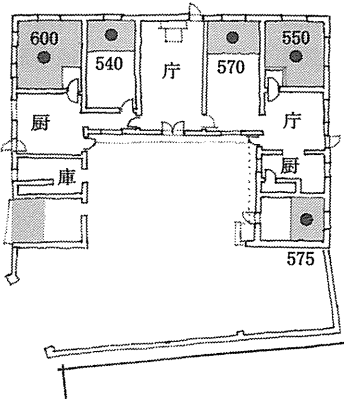


図5 三合院における総舗の配置と現存状況（例）

湾裡 wl235 住宅群。総舗に墨を入れた。図中の●を付したものが現存（他は間取りにより復元）。添えられた数字は総舗の床高実測値（mm）。

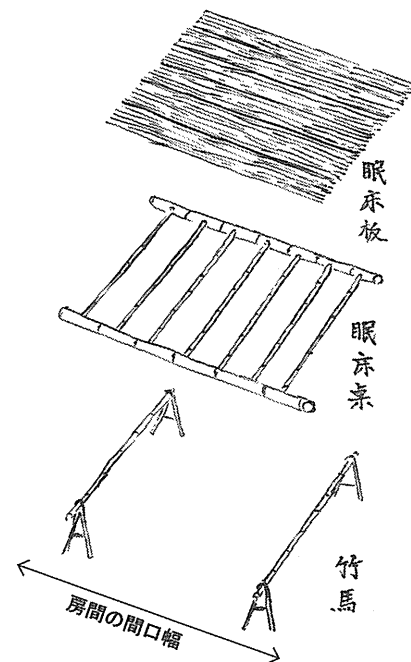


図7 湾裡地区で用いられた竹床の模式図

同地区在住の蘇氏（1921年生）がインタビュー時に描いたもの。図のごとく分解可能であったが、部屋の間口幅一杯に設置する点で移動可能な家具（寝台）とは異なるという。なお、脚部の方式が図2のTに示したものと異なるが、各地での間取りを総合すると、両方が併存したらしい。

持たず、床下は収納に使うが戸で隠すことがない（C1）。

一般に合院系住宅内に総舗を設える場合は、各房間の手前を土間として残し、奥の壁面に寄せて奥行き1間半から3間程度の揚床をつくる。これは台湾全土に共通の形態で、湾裡の場合も古いものはこれに当てはまるが、しかし湾裡地区の場合に特徴的なのは、第二次世界大戦後につくられた総舗では房間入口のドアの回転半径分、すなわち一辺が3尺程度の矩形だけを土間とし、残りの室内全部を揚床とするタイプが圧倒的に増えることである（C4）。ところで1950～60年代は煉瓦造の合院系住宅が鉄筋コンクリート造に建て変わっていく画期でもある。そこで採用される公私室（ホール＋個室群）型の平面ならば、扉の回転分をのぞき全面揚床とするタイプがどの房間にも採用できる。湾裡のケースでは、この局面でも植民地期以来の50～60cmの床高が一時期維持されるが、市街地の場合と同様、1980年代頃から床を20cm前後とするタイプが広まるようだ（C5）。このプロセスは重要な問題を含むので第7章で再検討する。

5. 家族の肥大

漢人の伝統的な家族制度では、個々の核家族を房と呼び、それが空間としての房（房間）に対応づけられる。たとえば家長夫婦（＋子供）の家族を大房と呼ぶが、彼等の寝室は正庁（先祖と神明を祀るホールで家屋の中心となる）の左隣の房間と決まっていた、この部屋のことでも大房と呼ぶ。次男以下は二房、三房……と言う。子供は小さいうちは親と一緒に同じ眠床（寝台）で寝るが、大きくなると兄弟や従兄弟たちと男女別に他の房間で寝るようになる。息子が成人して嫁を迎える時、家長は新しい夫婦のために新房を用意する。男はこうして妻とともに独立の房を構成し、子供を産み育てていく。やがて家長が亡くなると、長男家族が大房となり、弟家族も一般には土地建物を均等に相続するので、所有は細分化されていく。これを続ければ住宅は早晚物理的に破綻してしまうから、漢人は住宅を建て増し、拡張してやがては巨大な集落のごときものへ発達させる場合もあるし、そうでなければ弟家族がこの住宅から離れ、別の地で再び新しい家族のサイクルをはじめることになる。このような家族の拡大・分解のダイナミズムが、三合院をはじめとする規範的な建築形式との間に空間配分上の摩擦を引き起こしながら繰り返されるのである。

寝床はこのような制度のなかで社会的意義を持つ。新房を用意する際、漢人としての正統的な流儀は八脚式の紅眠床（図2のA）をつくることであり、時にその豪華さを競った。しかし、植民地中・後期以降の台湾漢人には別の方法もあったわけである。総舗は、実際に寝床の機能的設備としてだけでなく、家族制度に則って房を構える方式として広く認知されていた。筆者らの聞

取りでも、総舗をつくるのは、家の新築時、結婚時、出産時という答えが大部分を占める。個々の総舗の年代をたずねても、「あれは母が嫁入りしてきた時につくってもらったものだから…」というように記憶を辿る人が多い。姑が「子供ができたなら総舗をつくってあげる」と言っていたと嫁入り当時を思い起こす人もいる。後に建物の更新や財産分割に際して、自分の結婚の時につくってもらった総舗を、移転後の房間で再び組み立てて使っている人の話も何度か聞いた（この際、総舗の寸法が房間の内法に合うよう材を刻む）。付言すれば、総舗という言葉や概念は、結婚による宗族間の交流を通して（加えて注文主と職人の地域的關係を通じて）台湾社会に浸透していったのではないかと想像される。

ではなぜ総舗かといえば、子供をたくさん産んだ時代だから総舗が便利だったと誰もが口を揃える。眠床では夫婦と赤ん坊が寝られる程度だが、総舗なら人数を増やせるだけでなく、出入りも簡単に融通が利く。少し大きくなった子供たちが男女別に雑魚寝するにも都合がよい。

とくに戦中期・戦後期の住宅の過密さは多くの人が記憶するところで、台南市五條港地区において筆者らが聞き取った話では、30坪程度（間口5m×奥行20m程度）の比較的小規模な2階建ての街屋で戦中から戦後期にかけて30人が同時に住んでいたことがあるという。この家には房間は5つしかなく、1室に6人前後が寝なければならなかった。他の聞き取りでも、戦中・戦後期では3坪大の総舗で6～7人寝る、つまり1人1畳程度が普通だったようだ。また、先にふれた黄良銓「艋舺の雑居生活」（1942）によれば、台北市の艋舺大厝口にある王家の邸宅（三進構成の三合院）を調査したところ、全部で11房56人（大人37人、子供19人）が雑居していた（図1）。16基の「寝台」で彼らが全員寝られるはずはなく、住人たちは適宜「板敷」や「畳」の揚床をしつらえて対応していたのである。こうした状況をみると、眠床に対する総舗の優位がよく分かる。

日本植民地期には、医療・衛生政策や都市改造により出生率・死亡率とも改善し、台湾人口は1910年前後以降高い増加率で推移した。また戦中期は多産な一方で住宅は不足したであろう。しかし、植民地期から戦後期にかけての台湾の世帯構成の特徴については統計的把握を試みる必要があり、今後の課題である。

いずれにせよ、総舗のキャパシティは、家族のライフサイクルが住宅との間に生み出す摩擦を眠床の場合よりかなり小さく抑えることができただろう。つまり、相当の過密状態の下でも、家族（房）と居室すなわち寝床（房）を結びつける漢人的観念を破綻させにくい利点があったと考えられる。逆に、少子化が進めば家族が雑魚寝する装置としての総舗の存在理由は失われ、個室と洋式ベッドとが取って代わることも想像できる。しかし、

実際のプロセスはさほど単純ではないようだ。第7章であらためて検討したい。

6. 文化意識と社会階層

漢人として最も正統的な寝床は紅眠床であり、嫁を迎えるため新調した紅眠床を置いた新房を用意できるかどうかはその家の社会的威信にもかかわる。しかし、これは一定以上の富裕層の話であって、庶民には紅眠床は手が出なかったという話は、とくに貧困地域に属す湾裡ではよく聞いた。その点、総舗は板床をしつらえる程度なら負担は大きくないし、子供が多くても寝られるから都合がよい。こうした意味では、総舗は規範性よりも合理性によって選択されたと言えるだろう。

別の側面からも同様のことが指摘できる。漢人住宅では元来天井を張らないので母屋や垂木が露出するが、たとえば三合院の房間で寝ている人の上を棟が走るのはタブーとされる。だから類型C1(図2)のような最も単純な総舗では、その奥行きは奥の壁から棟までの間に収めなければならない。しかし、天井があれば身体の切断というタブーは無視できるようになるという(C2-4)。かくして総舗の床面は拡大していく。総舗は寝床の拡張であるが、それは居室の空間分節をこの種の伝統的規範から自由にとることとも関係している。

しかし一方で、前出の呉新榮「私の内臺生活の交流」(1944)は、彼らが「台湾式家屋」に総舗をつくる理由のひとつは「タタミ敷のザシキ(タタミを敷かないザシキもある)を持つことは中流階級の流儀である様に思はれてゐる」ことにあると説明している。紅眠床が有するのとは別種の規範的価値を、総舗は有していた。彼は、多くの中流台湾人が「ザシキに住みたいばかりに」、天井を吊ったり、畳を敷いたり、様々な「苦心を払はねばならない」と書く。そして、これが「上流」でなく「中流階級の流儀」であるという点も興味深い。

彰化縣鹿港鎮の大木匠師・施氏(1919年生)は植民地時代に政府関係の官庁・官舎から漢人系の寺廟や住宅まであらゆる建築を経験した大工だが、一般の台湾漢人に依頼されて室内に総舗をつくる仕事も数多く経験した。彼の場合、日本の正統的な座敷と「総舗」を同一視しており、そのため台湾の一般家屋に設えられた総舗は「田庄総舗」(田舎の総舗)と呼んで区別する。総舗は、日本の揚床が高さ1尺半前後なのに対して2尺前後と高く、敷畳のサイズはまちまちで、障子と畳の割り付けも無関係であることが多く、脇に尿桶(オマル)の置き場が設けられることもある。筆者らは、彼の言う田舎総舗を主に調査・考察していることになるが、彼にはそれを日本家屋の正統から一段劣ったものとみる意識がある。

貧困な農漁村であった台南市湾裡の蘇氏の目には、しかし総舗は「都会から来た」先進的な設備と映った。こ

の村では、1921年生まれの彼が子供の頃はまだ総舗はわずかしかなかったが、大人になるまでにほぼ総舗に入れ替わったという。そして、それ以前はこの村の人々はみな竹造家屋に「竹床 tek-chhng」(竹の揚床)を設えて寝ていたのを蘇氏は明瞭に記憶している(図7)。

一方、在来の価値観に浸って生きてきた「上流」階層にあっては話はそう単純でない。鹿港の丁氏(1933年生)は科挙で進士を出した名家の一員で、彼の祖父母は漢文的教養を持ち、彼らの房間は紅眠床だったが、父母の代から大半の房間が総舗に変わったという。父親は家庭でも日本語しか使わない、模範的な「日本語家庭」に指定されるほど同化志向が強かったという。

一方、高雄県左營では、総舗と紅眠床とが折衷的に複合した珍しい事例に出会った。正面からは伝統的紅眠床かと思われたその寝床は、しかし眠床(寝台)ではなく、房間の間口一杯に固定された束立ての揚床であり、紅眠床にはない引戸を、日本式の障子とせずに中国風意匠にアレンジして滑らせ、床には畳を敷いていた。構造的・機能的には総舗だが、意匠的には紅眠床たらしめた結果であろう。こうした文化意識の機微は上流階層に特有のものであったと思われる。

以上のように、総舗の受容は台湾漢人の文化的自己認識と無縁ではありえなかった。それは社会階層によって大きく異なるだけでなく、世代によってもドラマティックに転換しうるものだったと考えねばならない。

7. 起居様式：生活行為とその空間的分節の変容

次に、総舗をめぐる生活行為について考えてみよう。まず就寝についてだが、聞き取りによれば、総舗が畳敷きならば直に身体を横たえ、「綿被」(掛け布団)をかける。畳がない場合は板床の上に「草生」(稲藁でつくられた分厚いムシロ)を置き、その上に「草蓆仔」(ゴザ)を敷いて寝る。台湾では一般に敷き布団は存在しなかった。枕は湾裡のような田舎では竹筒を少し切り落として下を平らにしたものが用いられた。

便所普及以前は、台湾漢人は「尿桶」「屎桶」と呼ばれるオマルを使った。尿尿桶は総舗の床下に置いてよい。しかし、土間側から向かって左か右に、奥へ寄せて押入を設け、その手前側に残った空間に尿尿桶を置き、扉かカーテンで目隠しすれば、ちょうど寝床の横にトイレが付いたようになる(図2のC2に示した)。ただし、植民地政府の衛生政策や戦中期の「生活改善運動」によって村落部でも徐々に和式便器の汲取式便所が浸透し、尿尿桶の置場は次第に淘汰されていく。

総舗の手前の土間には卓・椅子や収納家具などが置かれた。ここまでは土足であり、総舗に上がるときに靴を脱いだのである。高さ2尺の総舗に上がるのはそう楽ではなく、踏み台を置くケースもあった。

ところで、寝台を指す「眠床」という言葉は、たんに寝床の意味にも使われ、それゆえ「総舗も眠床の一種だ」と言う人も多い。では、総舗はたんなる「広い眠床」だったのだろうか。

苗栗县政府「苗栗歴史老照片」^{注20)} (デジタル・フォト・アーカイブ) 中に、中国服を着た男性5名があぐらをかき、茶を喫して卓袱台を囲む写真が一片ある。背後には押入と床の間風のニッチが見える。敷居が切られているか不明だが、框の手前には板床が張られており、おそらくさらに手前に土間があったと思われる。写真データには「民国前6年左右」(=1906年前後)とあり、この年代は早すぎるように思われて疑わしいのだが、ともかく植民地期に床座の習慣があったとすれば興味深い。ただし、筆者らの聞き取りでは総舗上での喫茶の習慣は皆無ではないもののほとんど聞かれなかった。調査中に時折出会うのは、物書き用の低い机や、足のない鏡台である。女性は朝目覚めると総舗の床上で髪をまとめたのであろう。聞き取りによれば子供が友達の家遊びに行ったとき友達同士で総舗の上で遊ぶこともあったという。上記アーカイブ中にも、4〜6歳くらいの子供たちが6人、総舗上に敷かれた草生(ムシロ)の上で裸足で戯れている写真がある。以上のように、決して豊富とはいえないものの、眠床(寝台)ではありえない行為が総舗上に生じていたことを示す断片的な根拠はある。

そして、むしろより注意を要すると考えられるのは、湾裡地区で今日一般的にみられる、類型C4、C5の形態である。三合院の房間は、左右に別の房間が連なる場合は居室内部が通路の機能を兼ねる。しかし、おそらく戦後になって房間に壁を挟むことで文字通りの廊下と文字通りの個室をつくることにはじまる。その際、個室には総舗をつくる習慣が持続するが、そこに土間空間を持ち込む理由は薄く、いっそ床を扉の回転分以外はすべて塞いでしまう方が使いやすい。こうしてC4が成立すると考えられるが、この時点で土間はたんに下足を脱ぐ場所となって、個室の行為はすべて床上に回収されたことに注意しよう。しかし、ドアを開けていきなり高さ50〜60cmの床へ上がるのは唐突である。湾裡では、このタイプの総舗に洋式ベッドを置き、勉強机でコンピュータを使うといった光景を見たが、これは不自然きわまりない。生活行為をそっくり2尺ほど持ち上げる根拠は床下収納くらいのものだが、それもモノの出し入れ口が小さく使いづらい。のちに床面を15〜20cm程度に押さえたC5のタイプが増えていくのはいわば当然の成り行きであったろう。

あらためて仮説的なシナリオを示してみよう。本来はほとんどの生活行為が土間にあり、就寝だけが眠床(寝台)によって50〜60cmほど持ち上げられていた。総舗はこの高さを継承し、天井や障子等を備えながら室内に

広がっていった。この床面が次第にさまざまな生活行為を呼び込んでいく。そして、(湾裡での観察では)個室化とともに室内が揚床で覆われるに及び、土間/床上の間で配分されていた個室の生活行為がすべて床上側に回収される。このとき、眠床から継承していた床高の不合理性が自覚される。低床型になった総舗は、ベッドも勉強机も取り込める生活のプラットフォームとなる。興味深いのは、一般論としては洋式ベッドが総舗を淘汰していくように見える一方で、総舗が自らの変容によってベッドと折り合いをつける道筋もありえたことである。

ここで、C4やC5の生成によって床上に回収されたのは私室内の行為にすぎず、「庁」(正庁・居間・食堂等)と呼ばれる公室は一般に土足のままである。このとき公私室間の床レベルの差は、上下足の境界線に他ならない。もし、この境界線を住宅の出入口まで移動させれば、室内がすべて上足となり床レベル差は一切不要になるが、寝室はすっかり洋式ベッドに転換する。現代の住宅の多くがこれにあてはまることはよく知られるとおりである。さらに、近年の住宅では住戸内の一室を高さ40〜50cm程度の板張りの床とするのが流行しているが、これは「和室」と称され、融通の効く客間等として好まれている。内部空間がすべて上足となった住宅内に、旧来の総舗が名前を変えて復活したかのようである。

以上のシナリオは今後検証が必要だが、こうした台湾特有の特徴的な住様式が、総舗の生成と展開を踏まえてはじめて歴史的に理解されうことは間違いないだろう。

8. 材料流通の転換：竹床から総舗へ

筆者らは、大木(大工)・小木(建具・家具職)匠師や畳職など、総舗製作にかかわる台湾人の職人にもインタビューして、生産(発注から納品にいたるプロセスとそこに投入される技術、材料の生産等)の側面からも総舗にアプローチしてきた。ここではその成果を詳細に述べる紙幅はないが、材料とその流通の観点から、あらためて総舗を捉え直してみよう。

1932年の総督府調査に、台湾家屋を構造別にみた統計がある^{注21)}。これによれば台湾の全家屋の40%を竹造家屋が占めており、台南州では実に66%にも及んでいたことが知れる。竹圍(屋敷地もしくは集落や都市の周囲に刺竹を植えて防衛用の構えとするもの)や家具・農漁具等まで含めて考えれば、住環境を構成する素材としては竹が他を圧倒して風景の一切をつくるほどの存在感を持っていたのである。1930年代に入ってもなおこのような状況であったことは軽視すべきでない。今日、台湾漢人の伝統的住宅として竹造家屋を想起する人はほとんどいないし、その方面の研究もない。しかし、たとえば湾裡のような村でも、田中のような市街でも、今日の景観は植民地中期以降に刷新されたものだと考えた方がよい。

一般に想起される台湾漢人の伝統的民家について言えば、その材料である煉瓦や瓦、そして杉材等は、かつていずれも対岸の福建南部地域等で生産され、貿易港間をジャンク船で運ばれていた。それが途絶えるのはようやく戦中期になってからである。ただ、これら海上流通材で家屋が建築されたのは台南・鹿港などの中核的港市やそこから資材を取り寄せられる富裕層を中心とする、いわば出島のごとき世界の話であって、その周囲には土着的な竹の風景が広大な海をなしていたと考えられる。それは必ずしも台湾南部に限られない。中部でも今日わずかながら竹造の民家を見るし、鹿港の大木匠師・施氏によれば、貿易港鹿港ですら昔は「竹管厝 tek-kóng-chhū」（竹造家屋）と「竹床」^{注22}が少なくなかったという。

湾裡の蘇氏（1921年生）の記憶によれば、植民地の後期になっても湾裡の集落景観は見渡すかぎり竹造・茅葺きの家々から成っていた。家屋は竹の柱をより細い竹の貫で固めていく穿斗式の構造であり（図5のTを参照）、寝床には竹製の寝台とともに、房間の間口幅にあわせて竹でつくった揚床（図7）の両方があり、いずれも竹床と呼んでいた。高さは2尺前後だったという。しかし、1930年頃から終戦を挟んで1950年頃にわたる期間に、建築は竹造から煉瓦壁＋木造小屋組へ、窓格子は竹から鉄へ、屋根は茅葺から瓦葺へ、埕（庭）や土間は灰固（たたき）から磚（敷煉瓦）へ、そして寝床は「竹床から総舗へ」更新されていく。戦争が終わってもまだいくらか竹造茅葺家屋が残っていたが、まもなく消滅した。

彼等の認識では、たとえ床面が広くとも竹製の段階では総舗とは言わない。木造になってはじめて総舗と呼べるのだという。もし、すでに竹の段階で房間の間口幅一杯の揚床が存在していたのなら、それを木に置き換えるだけで類型C1のごとき総舗なら容易に成立する。しかし、この単純な転換は、背後のより大きな構造の変化のなかに置いて考える必要がある。

湾裡の集落の南に二仁溪という川が流れている。その川岸はかつて数百名の竹売りが蜿々と群がる「竹市場」でもあった。竹は上流の大崗山近辺から切り出され、筏に組まれて運ばれてきた。筆者らは、これとは異なる川筋の上流に位置する台南県左鎮郷でも話を聞いた。左鎮は平埔族（平地原住民。ほとんどが漢族と同化したとされる）の居住地として知られる地域だが、下流の漢人が竹藪を山ごとに指差して買い付け、伐り出した竹は筏に組んで流していた。竹の筏は平均で1Km、長ければ3Kmにもなり、100m程度の間隔で人が乗っていたという。おそらく、中山間地域の豊富な竹を平地に運ぶ同種のネットワークは台湾全土に幾筋も張り巡らされていたと考えられ、それに依存して家屋や寝床もつくられていた。つまり、煉瓦・杉といった海上流通材の建築と、より土着的な流通に属す竹の建築とが、台湾における住宅の地理的

世界をつくっていたはずだが、台湾住宅史の研究はこれをまったく看過したところに成り立っている。

総舗をつくる木材は、しかし、福建産の「福杉」ではなく、台湾産の桧材あるいは内地産・北米産の杉材などであった。台湾桧は「台湾割譲」直後に原生林が発見されたが、阿里山鉄道の開通（全線開通は1915年）、嘉義市の製材所集積の形成によってはじめて市場に十分な量が出はじめる。内地杉・米杉等は蒸気船で運ばれ、北は基隆港、南は安平港（台南）で荷揚げされ鉄道・道路で消費地に向かった^{注23}。つまり、総舗を成立させ、普及させた物的な背景は植民地経済によってつくり出された木材流通であったと考えられ、それは竹や福杉のような在来流通に属す材とは異なる意味を帯びて登場してくるのである。台湾では多くの人が今も桧を「ヒノキ」と日本語で言い、住宅の造作や建具がヒノキ材であることを誇らしげに説明するが、総舗もまた例外でない。

こうした「新材」と、やはり台湾で製造されるようになった洋式煉瓦や和瓦・セメント瓦等が、在来材の流通を次第に駆逐していく。今日「伝統的」とみなされる集落や町並みのかなりの部分が、この転換後のものであることには注意を要する。なお、本研究で調査した田中の中心部でも、植民地期には、表通りに沿う煉瓦造・木造小屋組の街屋群の裏手にずらりと竹管厝（竹造家屋）が並んでおり、やはり竹床が広く使われていたという。洋式煉瓦の店舗と竹の住家という二重の景観は、転換期の様相を象徴的に物語るものであったろう。総舗もまたこうした脈絡のなかに位置づけを探る必要がある。

9. むすびに：総舗の歴史的位置づけをめぐる

最後に、総舗の歴史的位置づけをめぐる、今後検証されるべき仮説や課題を示して締めくくりにしたい。

まず、植民地期における漢人住宅への総舗の普及時期の問題である。1921年生まれの蘇氏が子供の頃に貧しい湾裡集落にも総舗がわずかながら入りはじめていたこと、総舗で頻用される桧の流通が確立するのが1910年代半ばであること、そして1931年総督府刊行の『臺日大辞典』に「総舗」が新語として採用されたこと。以上から考えて、総舗はやはり1920年代を画期として台湾漢人の生活へと急速に浸透していったと考えるのが妥当であろう。総舗は竹のような土着の生産流通体系とは異なるシステムに属していたが、蘇氏が「総舗は都市部から来た」という時、湾裡もまたこのシステムの末端に組み込まれようとした瞬間を物語る。そして、戦中期から戦後期にいたる時期の家族の肥大化と住宅の過密化が、総舗の普及をさらに押し進めたと考えられるだろう。

次に、総舗起源論の焦点は、揚床状の「竹床」が何時まで遡るかである。竹床は、形態の面でも、流通・技術の面でも、日本植民地時代を待たずに成立しうる。竹管

厝（竹造家屋）が植民地以前から存在することは疑いなく、その内部に竹の揚床が設えられていたとしたら、そこに総舗の起源（語彙でなく、形態としての物的実体の原型）を見ることができる。それが植民地経済によって木材に置き換えれば、単純な板床型の総舗（C1）が成立する。なお、この問題は植民地期以前に漢人移民たちが台湾の生態的・民族的・経済的な諸関係のなかに土着化し、自らそれら諸関係を再編していく過程のなかで、彼等自身の住環境がどのような特質を持つに至っていたのか、という興味深いが困難なテーマにつながっている。竹造家屋とそれを取り巻く諸環境の復元研究が大きな課題だ。大半の台湾漢人の故郷である福建南部の伝統的漢人家屋との比較も必要であろう。ただし、19世紀までの台湾・福建南部の遺構や資料に多くを望むことはできないから、これも容易な課題ではない。

反対に、日本家屋との接触をより決定的なインパクトとして捉える立場もありうる。従来の常識どおり植民地以前には房間内に揚床を設えることはなかったが、日本人住宅の出現と木材流通の活発化により、富裕な階層ではいきなり和室型の総舗（C3）が現れ、庶民階層ではもっと簡素な板床だけの総舗（C1, C2）がつけられたが、もともと竹が支配的だった地域では、木造に転換する前の過渡期にあつて竹床を総舗のごとく揚床式につくことも行われた（T）、と考えるのである。

このように、植民地期以前からの原型を想定するか、植民地支配のインパクトを重視するかで、総舗成立の理解はかなり違ってくる。前者は台湾起源・連続説、後者は日本起源・切断説と呼べようが、いずれにせよ、この種の問題はそれを語る人の政治的立場を反映してしまう危険性がある。本稿では、総舗を理解するのに必要な観点と、可能な推論の道筋を複眼的に示すように努めた。

一方、植民地期に形成された総舗とこれに係る生活様式や価値観が、植民地解放後にどのように持続・展開するのかという問題は、現代台湾の特徴的な住まいと生活様式の歴史的背景を探ることにつながる。本稿では、とくに湾裡での観察からその一端を示唆しえたと考える。

<注>

- 1) 現代台湾社会は、複数の「族群」（言語・文化を共有すると自身が考える人々の集団、エスニック・グループ）で構成される。近年では、①ホーロー人（福佬人）＝約 70%、②ハッカ人（客家人）＝約 15%、③外省人＝約 13%、④原住民（先住民族）＝約 2%、と大別することが多い（%は人口比）。本稿では「台湾漢人」という語をとくに説明なしに繰り返し用いるが、その場合は基本的に①ホーロー人と②ハッカ人を総称しているものと理解されたい（もとより両者の区別は難しい場合もある）。
- 2) 一般に「台湾語」と言われる。閩南各地の言葉の集合体であり、さらにオーストロネシア系の語彙、客家語や日本語などの語彙も取り込んで発達してきた。原住

民、客家人、外省人でもホーロー語を解す人や常用する人も少なくなく、台湾住民の約八割がこれを使う。なお、台湾では公用語の北京語を「国語」としている。

- 3) 台湾総督府編『臺日大辭典』台湾総督府、1931-32 年／復刻：国書刊行会、1983 年、p.871。台湾総督府は、これ以前にも『日臺小辭典』台湾総督府、1898 年、『日臺大辭典』台湾総督府、1907 年を編纂しているが未見。
- 4) 中村綱「臺灣住宅と建築行政」『建築と社会』第 22 輯第 2 号、1939 年 2 月所収
- 5) 黄良銓「艋舺の雑居生活」（『民俗台湾』2-11、1942 年 11 月）
- 6) 呉新榮「私の内臺生活の交流」（『民俗台湾』4-8、1944 年 8 月）
- 7) 中川正「内臺生活の交流について」（『民俗台湾』4-5、1944 年 5 月）
- 8) 東方孝義『台湾習俗』同人研究會、1942 年、p.58
- 9) 藤島玄治郎『臺灣の建築』彰国社、1948 年
- 10) 国分直一『台湾の民俗』岩崎美術社、1968 年、p.207。1944 年 4 月～45 年 1 月に潮地悦三郎と共同で行った台北盆地の閩南系漢人農家の調査報告。『民族学研究』18-1～2 号、1953 年の掲載記事の再録で、本稿引用部分はこの再録時の補筆にあたるようである。
- 11) M・ウルフ著・中生勝美訳『リン家の人々—台湾農村の家庭生活』風響社、1998 年。原著：Margery Wolf, The House of Lim: A Study of a Chinese Farm Family, Prentice Hall, 1968 p.49
- 12) 同前 p.55
- 13) 郭中端・堀込憲二『中国人の街づくり』相模書房、1980 年、p.158
- 14) 同前 p.176
- 15) 沈祉杏『日治時期台湾住宅発展 1895-1945』田園城市、2002 年
- 16) 呉明修他『台湾の住宅建築の変遷と住まい方に関する研究』調査研究報告書、第一住宅建設協会・地域社会研究所、1993 年
- 17) 楊秋煜『大溪の「店」之空間構成探討』中原大学建築学系碩士論文、1999 年、p.96
- 18) 賴裕鵬『「騎樓式」街屋比較之研究—以鹿港中山路與泉州中山南路為例』雲林科技大学碩士論文、2006 年、p.88
- 19) 趙雅玲『彰化縣田中鎮「牌樓厝」街屋空間構成之研究』雲林科技大学碩士論文、2002 年 は例外で、複数の実測図に「総舗房間」と記す。ただ、聞き取りでは「総舗房間」という表現は聞いたことがない。
- 20) 苗栗縣文化局。http://lib.mlc.gov.tw/webmlh/
- 21) 『衛生調査書 第十一輯（実地調査の三）生活編（本島人）』台湾総督府警務局衛生課、1932 年
- 22) 「竹床」は、『臺日大辭典』（台湾総督府、1931 年）では「竹の寝台」と説明されるが、もっと広い揚床状のものも広く存在したらしい。
- 23) 萩野敏雄『朝鮮・満州・台湾林業発達史論』（林野弘済会、1965 年）

<研究協力者>

翁雅瑩（台南市社区营造发展協会）
 黄仁威（成功大学） 簡智威（東海大学）
 孫詩哲（建国大学） 吳文諭（東海大学）
 吉田藍（東海大学） 鈴木綾香（人間環境大学）
 岩間瞳（人間環境大学） 小林昭宏（人間環境大学）
 池田亮（人間環境大学） 五十棲千尋（人間環境大学）
 梅本友美（人間環境大学）
 鈴木琴恵（静修女子高級中学校）（所属は調査実施当時）